第三種郵便物承認　令和２年３月３１日(火曜日増刊)

令和二年三月三十一日　ＡＪＵ通巻一三八〇四号　昭和五十四年八月一日第三種郵便物承認（毎週火曜日発行）

AJU みずほ

2020 年 3 月 31 日
NPO 法人高次脳機能障害友の会みずほ発行
会報　第８０号

〒460-0021
名古屋市中区平和 2-3-10 仙田ビル

電話/FAX 052-253-6422
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ npo-mizuho@miracle.ocn.ne.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://www.npo-mizuho.com

（写真：みかんやま職員　Ｋさん）

目　　次

□コロナウイルス騒動から日本人の働き方改革を考える 、総会のご案内 Ｐ2
□高次脳機能障害リハビリテーション講習会 Ｐ3～9　□高次脳障害者支援のための講演会 Ｐ10～11
□働く仲間の集い Ｐ12～13　□企画グループ Ｐ14　□若い失語症者のつどい Ｐ15
□地区会だより、レディースの会 ・ミラクルＰ16　□ワークハウスみかんやま Ｐ17～18
□お知らせ Ｐ19～20

コロナウイルス騒動から日本人の働き方改革を考える

高次脳機能障害友の会みずほ理事長　吉川雅博

これまで日本人は、勤勉であり、体調が悪くても会社に出勤してしまうようなサラリーマンが圧倒的に多かったのではないかと思います。「働き蜂」という言葉もありました。今回のコロナウイルス騒動をきっかけに各自の「ワークライフバランス」や「フレックスタイム」など自分の働き方を見直すきっかけになるとよいと思います。

厚生労働省のいう働き方改革は、①時間外労働の上限規制　②年次有給休暇の時季指定や残業規制の厳格化　③同一労働同一賃金などであり、これらは働くことにおいて当たり前のことであると考えます。今回のコロナウイルス騒動で、「在宅勤務」や「テレワーク」などという言葉を知った人も多かったのではないでしょうか。現在では働き方は多種多様になっています。わが国でも働き方が変わってきていることを多くの人が認識すべきだと思います。いろいろな働き方が存在することを知ることも意味があります。ＩＣＴ（情報通信技術）の進歩は著しいです。

今回の騒動で、中国の学校ではオンライン授業が当たり前になっているような報道がありました。日本では、２週間程度学校を休校にしましたが、オンライン授業が可能であれば、学校を休校にする必要もありません。

今回の騒動のように働きたくても思うように働けないということがあり得ることを体験でき、日本人の働き方が変わるきっかけになるとよいと思います。多様な働き方があるはずです。ヨーロッパでは２ヶ月の夏休みが当たり前の国もあるそうです。

第 15 回総会のご案内

令和２年５月９日（土）　　イーブルなごや大研修室（３階）

13：00～　総会

14：00～　特殊詐欺被害防止教室　－県警のぞみグループ－

高齢者だけでなく、障害のある方々を狙った詐欺のニュースを最近よく耳にします。何にどのように気をつけたらよいか、一緒に学びましょう！

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、開催できない場合はホームページでお知らせいたします。また、ご確認が難しい方は、お手数ですが直接事務局までお問い合わせくださいますようお願いいたします。

高次脳機能障害リハビリテーション講習会

一般社団法人日本損害保険協会の助成をいただいて、昨年 11 月 23 日(土)名古屋市中区役所ホールで高次脳機能障害リハビリテーション講習会が開催されました。事前予約された方の中には当日体調不良などで参加を見合わせた方もいらっしゃいましたが、当事者・家族や医療・福祉及び保健関係者、行政関係、その他一般など 325 名の皆さまにご参加いただくことができました。

第１部は基調講演として「脳損傷によって生じる社会的行動障害と支援について」と題し、京都大学医学部附属病院精神科神経科の上田敬太先生にご講演いただきました。上田先生は多くの高次脳機能障害の方の治療に関わってこられ、脳損傷後に生じる様々な神経心理学的、精神医学的後遺症について研究をされています。高次脳機能障害の症状の１つである社会的行動障害は、脳損傷後の社会への適応を困難にし、社会復帰・社会参加の大きな妨げとなっています。社会的行動障害があることで様々なトラブルが生じるために、就労など社会参加を望む当事者・家族、それを支える支援者の方々が大変苦労をされることが多いです。上田先生は、具体的な症例をあげながら脳損傷後の社会的行動障害をどのように理解していけばいいのか、またどのような対応のしかたがあるのかその基本的な考え方などを豊富な知見をもとにお話ししてくださいました。

第２部は「社会的行動障害への対応のヒント」がテーマ。第１部から引き続き上田先生にご登壇いただきました。さらに交通事故で発症された 3 名の当事者の方とその方々をそれぞれ支えていらっしゃる支援者の方を迎え、東部支援センター笑い太鼓支援コーディネーター加藤氏の司会進行のもと、これまでのエピソード・その時の気持ちなど一組ずつ話していただきました。36 年前、高校生の時交通事故に遭われ、高次脳機能障害と知らないまま 30 年近くを過ごされてきた方は、就労後１～２年ごとに転職を繰り返すことになった経緯やその時の気持ちを率直に話してくださいました。続いてルール違反・マナー違反を許せなくて起こす行動が原因でトラブルを抱えてしまうという方、脳損傷後前職へのこだわりを捨て新しい職場を見つけた方が支援者の方と共に話してくださいました。

上田先生からは、まず登壇された当事者の方に「(登壇することに)嫌な思いもあったと思うが自身の症状をしゃべることは、自身の症状をさらに意識することに繋がり、より困ったことを減らす方向に働いていくいいこと」であるとねぎらいとエールが送られ、さらに３人の当事者の方それぞれのエピソードへのコメントがありました。その中では基調講演でも述べられた臨機応変について触れられ、１つの選択肢しかないのは損をする、選択肢を多く持ちその中から選べる方がいいと話され、その観点からトラブルが繰り返されるのは選択肢が 1 つしかないからであること、事故前と後の行動に変化があるときは、選択肢の１つとして「過去の自分を参照する」ことも有効であると言われました。逆に、脳損傷後よく出てくる「こだわり傾向」故に「過去の自分をなぞろうとする」のは選択肢を 1 つにしてしまうことであるとも言われました。

最後に行われた質疑応答は限られた時間でもあったので、質問用紙を事前回収。それを集計し、まとめたものについて上田先生からていねいにお答えをいただきました。第２部での当事者の方のエピソードを想起させる内容もあり、より一層支援の在り方、対応の仕方へのイメージも膨らみ、理解を深めることができたのではないでしょうか。

参加された皆さまからのアンケートでは、医療・福祉関係者の方から「当事者の生の声を聞くことができたり、思いを知ることができたりしてよかった」といった声が複数寄せられました。また、「支援のヒントを専門家から聞けた」「高次脳について間違った認識をしていた事に気付いた」「体験談を聞くことで講演会の内容を具体的にイメージできた」などの声、当事者が登壇して個人情報を開示してくれたことへの驚きの声がありました。また、当事者の方の中には、日常の中で度々研究目的のアンケートが送られてくるといった背景もあり、それが家族の負担になっていることに触れ、「関心を持ってもらえるのはありがたいが、自分たちは研究の材料ではない。」といった複雑な思いを書いてくださっているものもありました。　（都留）

参加者内訳　　単位は人数（）内は％

当事者	家族	医療・福祉関係者	その他(行政含む)
47 (14.5)	85 (26.2)	164 (50.5)	29 (8.8)

質疑応答より・・・(抜粋)

Q　他の利用者への過干渉や注意する行為にどのようにすればよいか？

A　原因が周りの音や声に反応しているとしたら、単純に考えて解決策はパーテーションやヘッドフォンを使ってみる。また、利用者同士の相性も考えて環境を整えてみる。精神論はダメ。

Q　受傷後感情のコントロールが上手くいかない。改善はあるのか？

A　年月の経過とともに緩やかに改善するが、生活の構造化が必要。自分の取説(今の自分に合った生活を工夫)があると、失敗の原因とそれを減らすための方法を本人が理解する余裕ができ、改善につながる。ただし、一人では難しいので、周りも一緒に工夫して共通の理解をすることが大切。

Q　病院同士・福祉関係どうやって連携するとよいか？

A　他科連携は普段から準備。顔見知りになって、連絡し合う関係を築いておく。

Q　易怒性のある人・ゴミ屋敷状態の人への対処ポイントは？

A　病識を外在化によってつける。「失敗している事」「困っている事」は脳の傷が悪さをしているのであって、本人のせいではないことを理解してもらいながら普段の症状について話すことが大切。ゴミのため込みは数カ月の周期で起きているマイブームであることが多い。そこを見極め、ブームを過ぎて関心や執着が薄れるタイミングで整理すると良い。

Q　つながっても本人が支援を断る。孤立が心配。

A　支援の入り方は基本仲良くなること。支援者が悪いというわけではないが、最初から支援と大上段に構えると支援される側がひいてしまうのでは。支援の前に、当事者が反応してくれる窓口・通路を見つけ、仲良くなる関係を作っていくことが大切。

多くの方に足を運んでいただき、講演会を無事終了することができました。スタッフはじめ、ご協力いただいたみなさまに改めて感謝申し上げます。

・・第２部　体験談・・・・・

Ｈさんの困りごとに寄り添って

天白区障害者基幹相談支援センター
相談支援専門員　　石邨　桂子

Ｈさんとは３年程前にリハセンの高次脳支援課の方からの紹介で知り合いました。会った時の印象は、生活に大変疲れていること、就労への焦りがあり余裕が全くないという状況でした。Ｈ さんは子どもの頃に脳外傷を受けて数日は意識不明だったと聞いています。それから約３０年後にようやく高次脳機能障害との診断を受けています。その間は、誰からの支援も受けず、暮らす場所や仕事探しも一人で頑張り続けてこられたようです。

私どもがＨさんに提案させていただいたことは、一旦は一般の就労探しを辞めてもらい、福祉系の雇用契約できる事業所へ通所すること、給料が減る分は公的な経済支援を受けることです。まずは生活を安定させること、そして職場でトラブルになりやすい行動を一緒に考えていくことにしました。

サポートを始めてみると、Ｈ さんの人柄や強みはすぐに分かりました。事業所への通所は安定していましたし、非常に真面目な性格でどんなことも決めたことはきちんとすすめていく方でしたから、どんなことでトラブルになるのだろうと思っていた矢先でした。

職場の同僚の仕事の仕方がさぼっているようで許せない、また支援員が注意をしないのはもっと許せないという感情が一気に爆発してトラブルになったようです。独善的な処罰感情から感情のコントロールが効かなくなる症状でした。あ、これなんだ、こうした症状でＨさんは長く苦しんでこられたと実感しました。以降は時々基幹センターに来てもらい、じっくり話を聞く、行動を一緒に振り返ることで一時的には改善しましたし、Ａ型事業所や高次脳支援課の方とも一緒に話し合いをして、支援の方向を共有したことで頻度は減少していったと思います。

支援の第２弾として、就労に向けた課題を３つ挙げ５段階評価で毎日事業所で振り返りをしてもらいました。５ケ月後にはかなりの成果があり、Ｈ さんは自分のやるべきことがわかってきたので、周りの人の行動が気にならなくなったと話されるようになり、今は事業所に通所しながら就職活動をされています。

Ｈ さんの支援を通じて感じたことは、高次脳機能障害の方への理解があまり進んでいないこと、きちんと支援者につながり本人が本当に困っていることに気づくこと、本人にも振り返りやすい環境を整えることが大事だと思います。

社会的行動障害のある方のリスタート

特定非営利活動法人　高次脳機能障害者支援「笑い太鼓」
高次脳機能障害者支援センター　施設長　金田　輝明

M さんと初めてお会いしたのは約３年前、回復期病院でのリハビリをご本人の意思でやめ、就職しようと母親と共にハローワーク巡りをしている最中でした。最初の印象は、大人しくちょっと子供っぽい方。高次脳機能障害者支援センターに通うようになって、周囲の環境に振り回され混乱してしまい、特に怒りの感情がコントロールできなくなってしまったことをよく覚えています。毎日のように本人が落ち着くまで一緒に話をしました。また、母親と病院にも協力を依頼し、少し落ち着けるよう薬も処方していただきました。ご本人の「早く就職して稼ぎたい！」という思いの実現のために、就職に向かっているという道筋が分かる具体的な支援を段階的に行いました。幸いにもご本人の真面目さが伝わった会社に就職することができました。

今回登壇した M さんに限らず、高次脳機能障害をおわれた方には、受傷前の生活、記憶が残ってらっしゃる方が殆どです。施設での日々の利用者さんとの関わりの中で、信頼関係を構築していくためには、まずは話を聴きご本人を知ることが重要です。話を聴く中に、現在の状態に、具体的に対応するためのヒントが隠れていると考えられます。特に社会的行動障害のある方には、現在のご本人の意思を尊重し、より具体的な動きが必要であると私は思います。

今回登壇のお話をいただいた時、正直 M さんに断られるかなと思いました。受傷前は鳶の仕事行っており、たくさんの人の前に出てマイクで話すなどの経験は皆無だったからです。11 月の登壇の際、就職してまだ 3 ヶ月。毎日 7 時間の仕事をこなしており、休みの日にわざわざ来てくれるかなと。仕事の様子を見に職場を訪問した日、この話をすると…「いいよ！」と二つ返事でした。ちょっと驚いて「なんで？」と聞くと「金田さん出て欲しいだら？じゃあ出るよ。でも原稿用意してね。」と話されました。結局当日は、自己紹介以外は殆どご自分の言葉で立派にお話できていました。M さんもさすがに疲れ、帰りの電車ではぐったりしていましたがどこか満足気。M さんがやると決めて主体的に参加した結果だと思います。

これからも支援者として、常に話を聴ける支援者でありたいと思った瞬間でもありました。このような機会を与えてくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

上田先生のコメントからの気づき

～　柔軟に対応　～

NPO 法人高次脳機能障害友の会みずほ
副理事長　　河田 幹子

開催三日前に予定していた支援者である当法人ワークハウスみかんやまの濵島施設長が登壇できなくなる事態となり、やむなくピンチヒッターとして担当させていただきました。K さんの事は、就労継続支援 B 型事業所と一人暮らし体験室みかんやまハウスを利用中も関わらせていただいていたので、久しぶりの再会となりました。

当初、実家の近くに高次脳機能障害に理解のある事業所がないことから、遠方にもかかわらずワークハウスみかんやまに通所されていた K さん。通所するためにはいくつかの交通機関を利用する必要があり、その途中でトラブルを抱えること(エスカレーター事件)が何度かありました。連絡を受け私も駆け付けましたが、相手方との交渉にご家族はとても大変な思いをされてこられたと思います。通所による負担を減らすため、また交通機関を利用し移動することで起こる無用なトラブルを避けるため、みかんやまハウスの４F を利用して、一人暮らしの準備をしました。K さんは現在、みかんやまハウス利用の流れから週末実家に帰るパターンで、単身生活を送りながらご実家近くにある就労継続支援 B 型事業所を利用しておられます。通所されている事業所の職員さんからもリーダー的存在と言われていることをお聴きし、環境設定（整備）によって、高次脳機能障害の当事者さんは順調な社会生活を送ることができると確信しました。

司会の加藤支援コーディネーターの「今後どうしたいか、何をやってみたいか」の問いかけに、「結婚したい！」と即答でした。また、それについて周囲の登壇者の方に共感を求める発言もあったりして、緊張されることもあまりなく彼のキャラを全開で皆さんを和ませてくれました。結婚願望はどなたにもあるので、良いご縁があってパートナーが見つかるように願っています。

ただ、エピソードのエスカレーター事件に関して「受傷前のあなただったらどう対応しましたか？」という上田先生の問いかけに、K さんは「自分も歩く側だった」とこだわることなく自然に答えていました。それは、受傷前と後で大きく行動が変わったことがはっきりとわかる場面でもあり、「事故前事故後も全部自分なので、いくつかの選択肢をもって臨機応変になるべく損をしない方法を選ぶことが大切」とのコメントには、以前、中々気持ちを切り替えてもらうことができなかった時に、この聴き方があったらと思う場面でもありました。当事者はもちろん、支援者もより多くの対応の仕方の選択肢を持つことで、より良い支援ができるのではないかといったことに気づかされ、これからも選択肢の幅を広げていきたいと思いました。

高次脳機能障害リハビリテーション講習会に参加して

１１月２３日の高次脳機能障害リハビリテーション講習会に参加させていただきました。今回は、高次脳機能障害支援の流れと社会的行動障害について、精神科・神経科医の立場から上田敬太先生がお話ししてくださいました。

上田先生は、脳損傷後の治療の流れの中での「精神科医療の関わり」について、「ある種のせん妄がある時は抗精神病薬などの加療も必要なことが多い」ということ、しかし、「投薬に頼り過ぎるのではなく必要なリハビリができるように、なるべく最少量でコントロールをすることが大切である」ということを話されていました。また、精神科医療にのみかかり続けるのではなく、社会復帰のためのリハビリへとつなげていくことが大切であるという説明もされ、それを聞いて、精神科とリハビリテーション病院との相互の連携が取れるシステムができれば、今まで以上に当事者のそれぞれの状態にあった支援につながるのではないかと考えました。そのためにも、より多くの精神科医の先生方に高次脳機能障害の特性を知っていただき、その当事者に合った対処や治療をしていただけるようになって欲しいと切実に思いました。

社会的行動障害については、画像を交えて原因・状態・対処方法について説明していただいたことで、その対応の難しさと当事者の戸惑いや辛い思いを感じることができました。

会場で会った当事者の方が、「社会的行動障害と言われても、自分の行動の何がそうなのわからず不安な思いを持っていたが、今日の上田先生の話を聞いて少しは理解できてホッとしました。」と話されていました。

上田先生の優しい話し方とユーモアあふれる説明のおかげで、私も難しい内容をより深く理解する事ができました。当事者にとってどんな支援がよいのか、当事者の思いを大切に考えながら、これからも焦らず一緒に過ごしていきたいと思います。

（当事者家族）

高次脳機能障害者支援のための講演会

長久手市より後援をいただき、特定非営利活動法人百千鳥、株式会社マゼンダと共催で講演会を２月８日（土）　長久手市福祉の家集会室にて開催しました。大同病院・だいどうクリニックリハビリテーション科部長の深川和利先生より、障害の特性および地域でどのように支援すればよいか等をご講演いただきました。毎年、全国各地で高次脳機能障害に関する講習会・研修会や、家族向けの勉強会が開催されていますが、当事者・家族からのご相談の際には「事業所の支援員さんが高次脳機能障害をよく知らない」「役所の窓口で相談しても支援につながらない」といった困りごとが多く聞かれます。そのたびに、家族会としては当事者・家族はもとより、支援者の立場にある方たちに、どのような障害なのかを知っていただくために、また正しく理解していただくために今回のような活動を地道に続けていくことが必要だと考えます。参加された支援者の方々の中には、障害特性について詳しくご存知ではなかったという方もおられましたが、そういった方からは、帰り際に「具体的でとてもよく理解できました」「参加して本当に良かったです！」という声をいただきました。今後も、家族会として啓発につながる機会を重ね、多くの方に正しく知っていただき理解していただく努力をしていきたいと思います。　（長谷川）

特定非営利活動法人百千鳥・株式会社マゼンダ
代表　　竹田　晴幸

今回、みずほの会主催、みずほ地域勉強会の企画で、深川先生のご講演を拝聴いたしました。恐縮ですが、この企画を共催させていただきました特定非営利活動法人百千鳥・株式会社マゼンダ代表の竹田です。

一番印象に残ったのは「関係性の障害であること」「本当の中核となる障害/注意障害、記憶障害、遂行障害/は専門的に見ると異なっている場合がある」のフレーズでした。私たちの日頃の活動内容は、相談や暮らし、就労、余暇のサポートと多岐に渡っています。その中で、特に外出など余暇支援の活動があります。あくまで自分の支援上の経験になります

が、先生のお話の通り、なるほど高次脳機能障害のある利用者さんと一緒にレクレーション外出した時、端的に言えばご本人に課題への取り組みが発生するような自立支援のプログラムや就労支援、生活リズムをサポートするとき「以外」、楽しみの時間には、何ら支障はない、と感じました。当事者の方と関係する前に、関係する種、例えば作業だったり、仕事だったりなど、それがまさしく火種になりうるもので、取り組み方が大事なのだと、改めて感じました。

先日、当団体にタイの看護の留学生の方が来訪され、施設の見学案内をしました。その際に、うちの高次脳機能障害のある利用者さんに、「自分の障害の事や頑張っていることを話してみては？」と言いました。彼は、最初は日本語で、途中から英語も交えて説明してくれました。「とても普通に見える。よく回復しましたね。是非、タイに遊びに来てください。記憶がなくとも心に残るようにします。」とタイの学長さんが英語で回答されていました。心は万国共通、理解は人の輪を作ると思います。

今後も是非、普及啓発をお手伝いさせていただければと思います。

特定非営利活動法人百千鳥　相談支援おかげさん

西　奈美

今回参加させて頂いた勉強会では、高次脳機能障害について分かりやすい言葉と表現で説明され、これまで何となく分かっていたような気になっていた事を知識として落とし込むことができたと感じています。

福祉サービスや支援を必要とする方々は、それぞれの置かれた環境の下で周囲との相互作用が上手くいっていないことで困りごとが生じます。ご本人や環境に働きかけることが支援の目的でもあるので、困りごとの背景を「知ること」や「気づくこと」は重要だと捉えています。

そのため、講演の中での「知っていれば見える・知らないから見えない」という部分には強く共感し、その大切さを再認識することができました。知っている人が一人でも多くいれば、互いに受け入れ合うことができ、より良い地域になっていくのだと思います。

そういった意味で、今回の啓発活動はとても有意義だったと思います。貴重なお話を伺う機会をいただきありがとうございました。

働く仲間の集い

就労中の高次脳機能障害のある当事者が、働く中で抱えている悩みや共有したいことを、同じ障害のあるメンバーや、スタッフとざっくばらんに話し合いながら、少しだけ肩の荷を下ろしたり、明日から前向きに進めるように…

2 月 15 日（土）11 時 30 分から、上記の趣旨のもと「働く仲間の集い」が名古屋市総合リハビリテーションセンター（名古屋リハ）で初めて開催されました。開催に向けては名古屋リハ就労支援課職員とみずほの担当スタッフの間で準備のための打ち合わせが何度かありました。

当日の参加者は当事者 9 名、名古屋リハ職員 2 名、みずほの担当スタッフ 2 名の計 13 名でした。主催者からの会の趣旨説明の後、「自己紹介」、「グループワーク」と進行。「グループワーク」では、当事者のみなさんが意見交換。活発な話し合いがなされました。話題に上がったのは、「資格の取得」、「職場選び」など多岐にわたっていました。

皆さんの意見交換が活発で
スゴイ！

資格

簿記・ワープロの資格を目指した

宅建の資格を取ってから、いろいろな資格に挑戦し向上心が出てきた

ただ資格を取るだけでなく自分のやりたい事(目的)のための資格が必要

職場選びについて

やりたいことは自宅から遠いため、主治医と相談、体の事も考えながらやれそうな仕事にした

以前は自宅から近い職場だったが、いろいろあって、今は通勤は遠いが『やりたい仕事はここだから』と頑張っている

パソコンは苦手だったので、今は簡単な作業の仕事をしている。

いろいろな状況でその会社とマッチした場合に、それぞれの状況での話し合いが必要。
近年は、高次脳機能障害の方も働きやすくなっている気がします。

その他職場での理解とその対処の仕方・悩み

理解してもらえないときは、障害者手帳を見せて理解してもらっている

高次脳機能障害の手帳？自分は身体障害者の手帳しか持っていない

以前は障害者手帳(精神)だったので、持ちたくなかった方も多かったが、企業も受け入れるようになってきている

失敗続きでできることがなくなってきている

記憶障害と注意障害があり、メモ、スケジュール管理(日報をメールで)している

メモって必要？

書くことで見直しができる。
記録は必要

会社は理解してくれているが、同僚等の理解は難しい

メモをそこら中に貼ることで周りの人が見てくれる。それで障害を理解してもらっている。障害を前面に出して理解してもらう

最後に、まとめと今後についての話し合いがありました。参加しての感想では、いろいろな意見や考えが出されそれを聞くことができてよかったこと、話をすることでストレスの発散ができたこと、障害で悩むことが共有できたことなどがあげられ、今後も継続して開催して欲しいという要望が多く出されました。当事者の皆さんに書いていただいたアンケートでも、「白熱して大変良かった」「自分一人では気づけなかったことが集団で集まるとその方面で詳しい人から助言をもらえて非常に役立った。」「皆の意見をしっかり聞け、自分の言いたい意見を言えて満足している」など有意義な時間を過ごすことができたと言った内容が多かったです。次の集いで話してみたいテーマややってみたいことについてもいろいろな声が寄せられました。

この集いが、お互いの悩み・思いなどを話し合う大切な情報交換の場になって共に前進できるようにお手伝いができたらな、と思いました。

（藤井）